
ささやかな音

かえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ささやかな音

【Nコード】

N4802Y

【作者名】

かえる

【あらすじ】

ある兄弟の帰り道、弟が感じた兄への恐怖。

奇行を繰り返す兄はそれでも弟にはいい兄だったはずなのに――

1

（前書き）

はつきり言って何じゃこりや、と思う方がほとんどだと思います。

「え？ワンピース？」の主人公和人と、その弟のある日の出来事を書いてみました。

……ホラーっぽいです。似非ホラーです。あくまでばいなので。暇つぶしぐらいにはなるかと。

雰囲気ssです。よろしければ本文へどうぞ

さくさくさく

落ち葉を踏みしめるそれは、とてもささやかな音。

「兄ちゃん、俺な！ プロになんだ、野球の！」

「そうかあ」

兄弟の影が長く細く伸びる、そんな夕暮れの公園。同じ制服の二人は家への近道を歩く。

「兄ちゃんは？」

年は二年も離れていない、学年で言えば二学年の差があるがそれにしても随分と落ちついた雰囲気の際は、弟の言葉にまだ丸みを感じさせる顔を優しく綻ばせて、質問の答えを探している。

弟はそんな兄に何の疑問も抱いていない。

この兄はいつもこうなのだ。発言をするときは必ず一拍、長い時では数分考え込む事がある。今回はどうやら後者の様で、弟はじれったく思うも兄の言葉を待った。普段兄が何を考えているのか弟にはわからなかったからだ。こうして兄の話を聞くのは楽しかった。

いつも笑ってーううん。

弟の思考に疑問が湧いた。

そう遠くない記憶に弟と兄は大きな喧嘩をしている。一度や二度じゃない、それこそ人からしたら大したことではないことにすら、お互い過剰に反応を返しては、殴り合いの喧嘩をすることもあったのだ。

なのにいつからか兄は、弟がどんなに理不尽な事をしようとも怒らなくなった。

それがいつからなのかは、はっきりとしないが大体兄が中学校に入学した頃からだったと、弟は思う。

そう言えば、入学式から帰ってきた兄はどこか悄然とした様子でえらく両親や兄の上の姉兄達に心配をされていたのを弟は思いだし

た。あの時構われているのが年の近いこの兄だったため、小学生の弟は幼いやきもちの末殴りかかっていったのだ。

そう、あの時にはもう兄は今の兄だった。当たった拳にも、笑ってポツリとごめんと言った兄に、弟は何も言えぬままたちつくした。これは、本当にあの兄なのかと。

「あゝ俺はあれだ、今の家で死ぬまで暮らしたいな。土地だけは無駄にあるから、小料理屋でもやってお前の活躍をテレビで見ながら客に自慢とかしてえ」

「爺くせーな兄ちゃん」
「うるせ」

まるで老後の夢を語るような様の兄がしかし弟にはとても幸せそうに見えた。

さくさくさくさく

落ち葉を踏みしめる音が耳に心地いい晴れた秋の夕暮れは、照れくさそうに笑う兄弟を優しく包んでいた。中学生にもなつて夢を語り合うなんてくすぐったい。そう思った弟は、視線を兄とは反対側に向けた。伸びる影が、兄の分だけふと止まる。

「落ち葉にはなりたくないな」
ぽつりと、兄はそう言った。

よく聞き取れなかった弟は、少ばかり背の高い兄を仰いで疑問の意図を示した。すると、兄はもう一度同じ言葉を繰り返して笑った。

「お前にはまだ早いカ」

弟はからかわれているのではないかと、兄をきつく睨んだが兄はというといつものように、微笑んでいた。

日はもうほとんど沈み、公園の外灯が二人の影を濃くした。

一瞬、兄の体が揺らめいて見え、言い知れない不安感が弟を襲う。いつもの帰り道、いつもの近道。兄が学校の行事などで遅くなるか、自分の部活がないときでないと一緒に帰れないが、両手では数えられない程度にはこうして一緒に帰路についている。変わらぬ日

常の光景だと言うのに今このときは確かに何かが違った。

弟は兄が好きだった。小さい頃から子犬がじやれるように遊んだり、一緒に暮らしてきた筈の兄なのだ。喧嘩をしようともそれは変わることはない。

しかし、今このときのこのこれは一体誰なんだろう。

自分でも何を考えているのか解らないと弟は混乱した。目の前にいるこれは確かに自分の知っている兄なのに、違うのだ。何かが、絶対に。

一步、弟は兄から距離をとった。それに、気づいているのかいないのか、兄は笑んだまま続けた。

「お前はまっすぐ進んでくれ」

笑っている筈の兄の頬に、流れていく水は一体なんだというのか？ 両親や他の兄弟たちは、兄の事を何かグロテスクなものでも見るような目で見ることがあった。弟はその理由がなんとなく解ったような気がした。

「兄ちゃんなんか変だ」

「ああ、変だよ？ いつものことだろ？」

間延びしたその言葉は間髪をいれず帰ってきた。

違和感。

さっきまでとは明らかに何かが違う。どうして兄が泣いているのか、どうしていつもなら間の空くはずの言葉がすぐに返ってきたのか、弟には解らなかった。

たまたまだと、言ってしまうばそれまでの事なのに、弟にはそれを飲み下す事は出来なかった。

「……だ、れ」

感じたままを口にした弟に、兄は今まで見たこともない顔をして、空に向かって何かを呟いた。

突然の奇行は今までも多々あった。

道でぶつぶつと壁に向かってしゃべっていたり、何も無いところで行きなり崩れ落ちたり、こうして急に泣きだしたり。けれど、一

瞬のうちにまるで人が変わったような、こんな事は初めてだ。

「大丈夫だ、今頼んだから」

頼んだ？ 誰に？ 虚空を見つめたまま言った兄に、恐怖すら感じ始めた弟は落ち葉を踏み飛ばし走り出した。

ざくざくざくざく

足音は一人分だ。兄はあの場所から動いていない、筈なのに。

「何急に走ってるんだよ」

兄は、運動が得意なほうではなかった。野球部でしごかれていた弟の方が走るのは早かったのだ。なのに、息一つ切らさず、弟に並ぶ兄の姿があった。それどころか、まるで足音がしないのだ。

背筋を伝うものがなんなのか、弟には言い表す事の出来る言葉が思いつかなかった。

「っ……！？」

走る兄弟は、人気のいない公園の茂みのそばで止まった。

弟はまるで操り人形の糸が消えたように、倒れる。それを兄はまるで羽毛の布団でも捕まえるように軽々と片手で抱きとめ、茂みの奥の木の幹にそつと背を預けさせた。

「な、今度から家族の前で連れて行くの止めてくれよ」

兄は空中にそう呟いて、流れる涙を拭きもせず弟を抱きしめた。

—————

さくさくさくさく

落ち葉を踏みしめるささやかな音に、弟は目を開けると視界には見覚えのあるマフラーがあった。

「……なんでおんぶ？」

寝起きのように掠れている自分の声に少々違和感を覚えつつも、弟はそう言った。後頭部しか見えないが、弟をおぶっているのは二つ上の兄だ。今日は部活が急に休みになり、この兄と並んで共に帰宅していた筈なのに、どういった経緯でこうなっているのかが弟にはわからなかった。

「いいじゃねーかたまには」

兄が言った言葉は、答えにはなっていなかったが、まあいいかと弟は心地よい酩酊感に任せ、兄の背に頬をつけた。それほど差がある体格ではないのに、兄の背中とは広く感じ、弟は重くなった目蓋を再び閉じたのだった。

「寝たのか？」

兄は、弟が眠った事を確認すると、また、空中に声をかけた。

「なあ、神様」

「なあに？ カズカズ」

「記憶改ざんって危険はないんだよな？」

「心配性だね、カズカズってば！ 神ちゃんに不可能はないのよ？」

「ならいいんだ」

「ふふふ、楽しかった？」

「あれが楽しめるなら俺は人間じゃないよ」

弟は兄の声のほかに幼い少女の声を遠くに聞きながら、意識を沈めていった。

「忘れちゃったね？」

うん、とその声に訳もわからず弟は返事をした。

沈みきる瞬間、間直に聞こえたその声は、なんだか温度を感じられず、弟は気を失うように眠りについたのであった。

（後書き）

読んでいただいた方にお礼申し上げます。

ギャグですのでお気になさらず。本編とは何の関係もないので。ただ書きたかっただけなんですよ。

危険があるうがなかうが記憶改ざんは良くないだろうと突っ込んでみたりしましたがまあ、楽しかったので良しとします。

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4802y/>

ささやかな音

2011年11月13日11時31分発行